

カホン（木製打楽器）を用いた地域密着型木育の可能性検証

東北森林管理局 米代東部森林管理署 岡部 真也
（元 三陸北部森林管理署）
東北森林管理局 三陸北部森林管理署 橋本 滯佳
林野庁 国有林野部 業務課 長岡 圭祐
（元 三陸北部森林管理署）

1. はじめに

三陸北部森林管理署の所在地である岩手県宮古市は、総面積の9割以上を森林が占める、緑の豊かな地域です（図1）。

また、宮古市には大きな合板材工場等があり、製造品出荷額でも木材・木製品の割合が産業全体の約4分の1を占めていることから、森林や木材製品が身近にあり、森林・林業に親しみやすい環境にあるように見受けられます（図2）。

しかし、宮古市は一般的に海や水産業のイメージが強く、地域住民が森林・林業に関わる機会が少ない印象を受けます。

このことから、地域住民に地域の木材とふれあうきっかけを作ることにより、地域の森林・林業への理解を深める木育を行うことは有意義であり、また、森づくりに貢献できる市民を育成する上でも重要であると考えました。

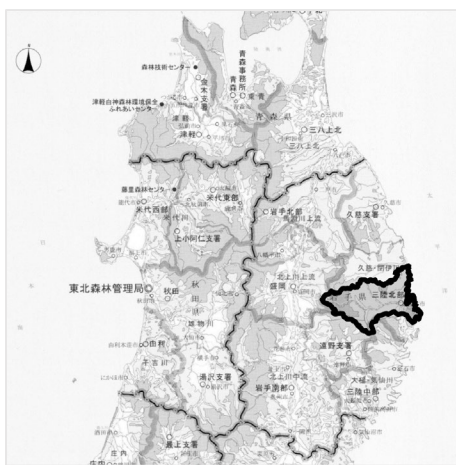


図1 宮古市の位置

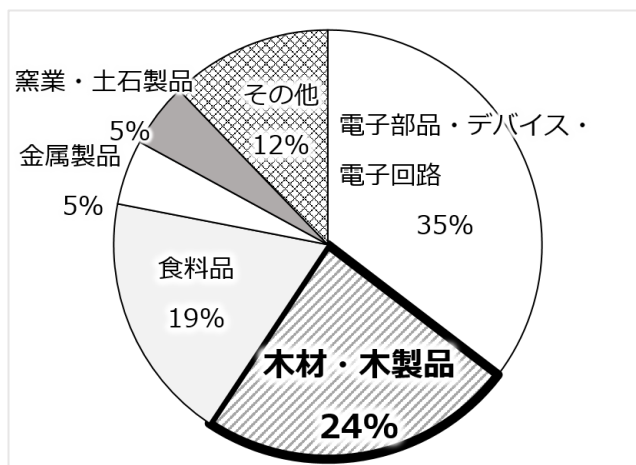


図2 宮古市産業中分類別製造品出荷額

2. 取り組みの方法

前述した宮古市の現状を踏まえた木育活動として、「興味を惹きやすい」、「地域と協力できる」、「地域で出荷されている木材製品を活かすことができる」、以上3点を重視した木工体験を検討しました。

そして、今回は「カホン」という木製打楽器に着目し（写真1）、地域と連携した木育を展開することで、地域住民に地域の木材とふれあう機会を提供するとともに、その成果を踏まえ、カホンを用いた地域密着型木育の可能性を検証しました。

カホンとは、スペイン語で箱を意味するペルー発祥の木製打楽器で、名前の意味のとおり空洞の箱型をしており、内側に弦を張った打面と音を反響させるための穴が開いた面をもち、打面を手で叩くことによって「バチッ」という特徴的な音を出すことができます。

また、カホンはほぼ全て木材でできている打楽器であり、音を鳴らすことにより注目を集めやすいことから、普段、木工や木材製品に関心のない方でも興味を惹きやすく、その上、構造も複雑でないことから木工に適していると考えました。さらに、主たる材料として合板材が使用されており、単板を複数枚積層した特徴的な層状構造が明確に確認できることから（写真2）、合板材を知るきっかけになることに加え、地域で製造されている合板材を使用することが可能であれば、地域の木材産業への理解に繋がると考えました。



写真 1 カホン

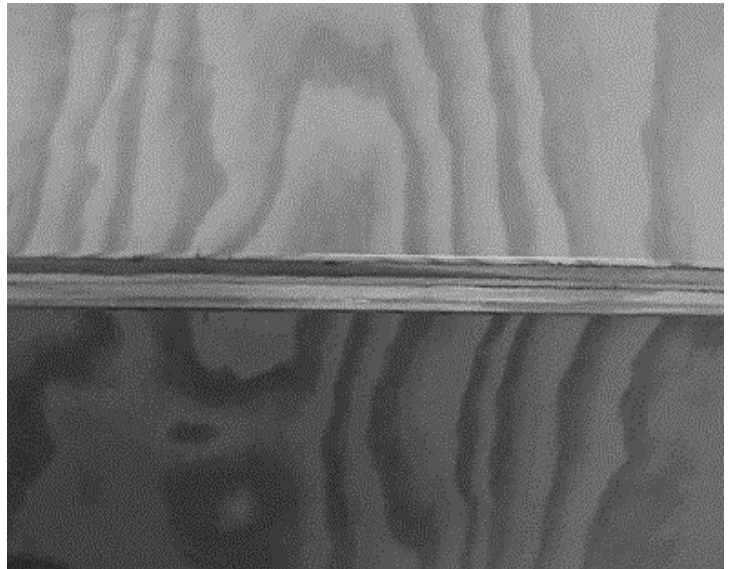


写真 2 カホンで確認できる合板材の層状構造

（1）材料と設計

当署管内の岩泉町にあるカホン製作工房のササキ研究所より、カホンの設計や様々な樹種でカホンを製作できることなど、カホン製作に関する知見を聞くことができました（写真3）。

また、使用する材料等を検討する上で、合板材工場のホクヨープライウッド宮古工場に合板材規格について聞き取り調査を行い、地域で製造されている合板材を使用しカホン製作が可能であることを確認しました（写真4）。



写真 3 ササキ研究所での打合せの様子



写真 4 ホクヨープライウッド宮古工場での打合せの様子

それらを踏まえ、簡易的な設計図を作成し（図3）、岩手県産のカラマツ合板材を主たる材料とした独自のカホンを製作しました（写真5）。

また、イベント等への参加を想定し、カホンキットを作成しました（写真6～7）。なお、作成した設計図は当署ホームページに公開しました。

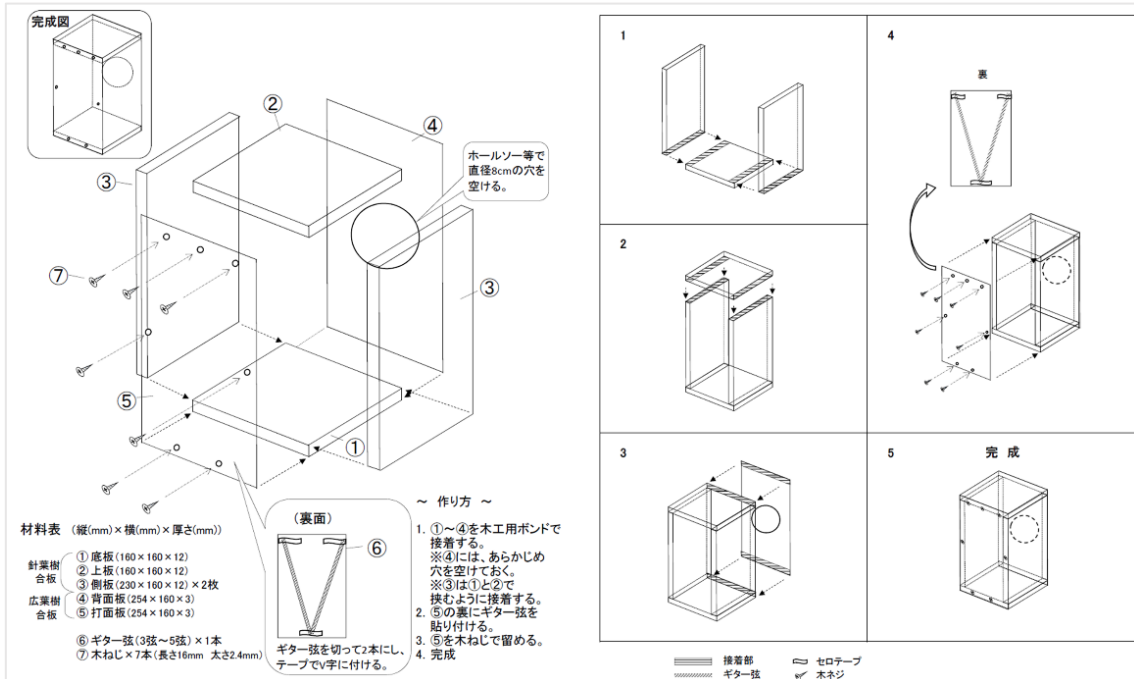


図 3 作成した設計図



写真 5 製作したカホン

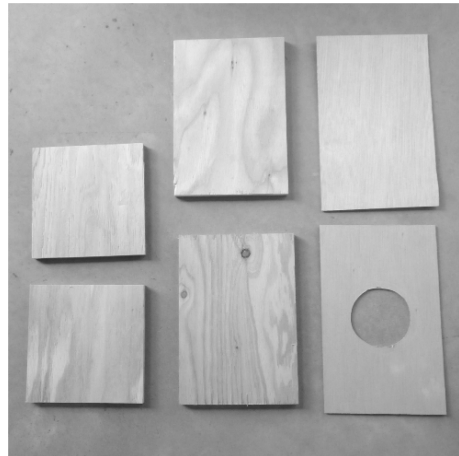


写真 6 カホンキット



写真 7 カホンキット作成の様子

(2) カホンを用いた木育の取り組み

地域のイベントである「宮古市産業まつり」に出展し、職員補助の下、カホン製作体験による木育を実施しました（写真8～9）。

また、体験者を対象としたアンケートにご協力いただき、取り組みに対する評価や地域の森林・林業等についての認識を調査しました。



写真 8 カホン製作体験の様子



写真 9 カホンを鳴らす子供たち

3. 取り組みの結果

参加者 28 名の年代別人数割合では全体の 46% を 10 歳未満、25% を 60 代以上が占めました（図 4）。男女別人数割合は全体としては女性が多く、10 歳未満及び 10 代においては男性が多い結果となりました（図 5）。

合板材について、10歳未満及び10代においては「知らなかった」との回答が多くを占めました（図6）。県産材の加工・販売が県内でされていることについて、30代以上においても「知らなかった」との回答が3割以上を占めました（図7）。

また、「木工を行ったことはあるか」という問いには、参加者の43%が「ない」と回答しました（図8）。そして、「今後も木工をやってみたいか」という問いには、9割近くの方から「今後も木を使ったものづくりをしたい」との回答を得ました（図9）。

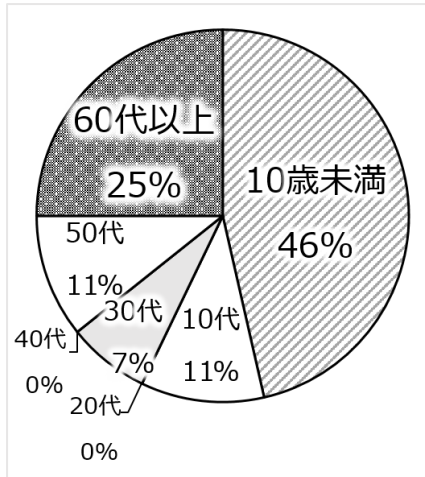


図4 体験者の年代別人数割合

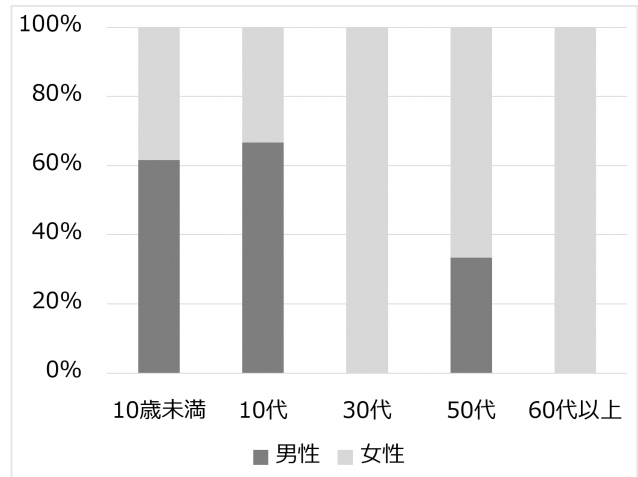


図5 年代別男女人数割合

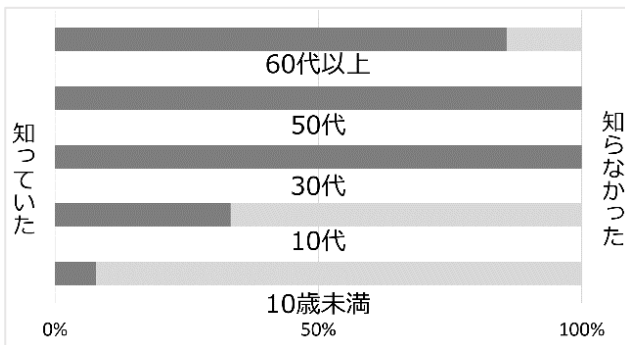


図6 合板材を知っていたか？

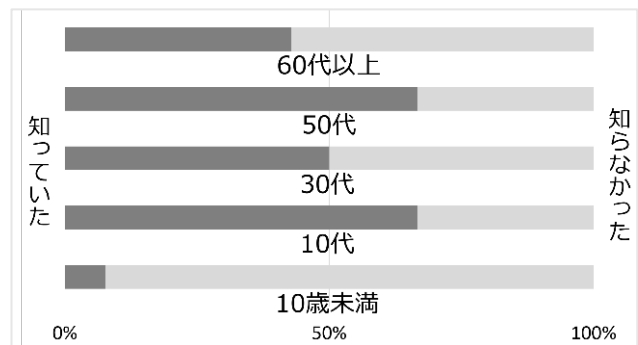


図7 県内の木が県内で加工・販売されていることを知っていたか？

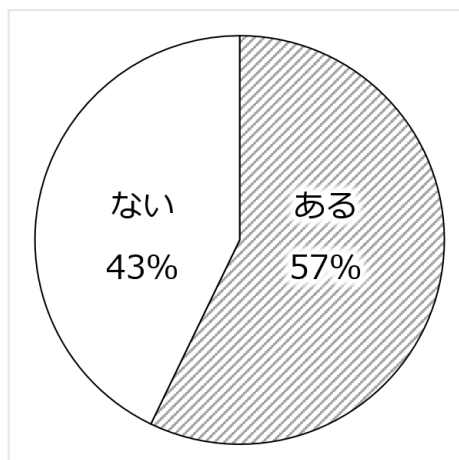


図8 木を使ったものづくりをしたことは？

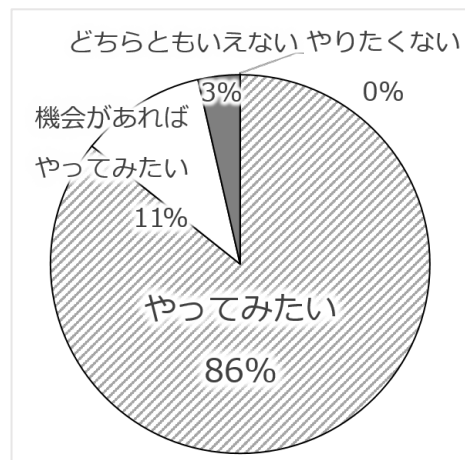


図9 今後も木を使ったものづくりをしたい？

以上の結果を踏まえて、以下のことが達成できたと言えます。

まず、宮古市主催の「宮古市産業まつり」において、ササキ研究所およびホクヨープライウッド宮古工場にご協力いただき、地域と連携した木育活動を実施することができました。

また、合板材の特徴が明確に確認できる材料を使用したカホンを製作したことによって、子供を中心に合板材を知る機会を作ることができました。

そして、岩手県宮古市で加工された岩手県産材を使用したカホンを製作したことにより、県産材が県内で加工されていることへの理解に繋がりました。

4. 考察

今回、参加者の中には、「木工を行ったことがない」と回答した方も多く見受けられたことから、カホンをを用いることにより、森林・林業へ関心がない方に焦点を当てた木育が実施できたと考えられます。加えて、前述したアンケート結果から、木材に注目するきっかけ作りに貢献できたと考えられます。

また、カホンを製作する中で、通常木工では用いることの少ない聴覚を含めた五感を通して地域材に「触れ」、親しみを深めることができました。加えて、カホンを「創る」ことを通して豊かな想像力を養うとともに材料としての合板材の特徴を理解し、合板材や木材利用、地元の森林・林業について「知る」活動を実施することができました。木育の観点において、「触れる」、「創る」、「知る」の3つのステップを実施できたことから、木材への親しみを深め、森を大切にすることを育む効果的な木育であったと考えられます。

さらに、60代以上の参加者が、子供の次に多くの割合を占めたことから、高齢者にも焦点を当てた木育が可能であり、また、カホンという打楽器を通して祖父母から孫へ、家族間で木育の輪が広がっていくことが期待できます。

5. 今後の展望

カホン製作の五感を通して木材とふれあうことができるという特性を活かし、今後も地域のイベント等に継続的に参加することによって、多くの方が地域の森林・林業について興味を持つきっかけ作りを行っていきたいと思います。

また、10歳未満及び60代以上の参加者が多かった結果を踏まえ、小中学校と連携し地域を学ぶ授業教材としての利用や、高齢者福祉施設等と連携し木工体験教室としての活用等、地域材を活用した様々な木育活動を模索していきたくて考えております。

さらに、カホンの材料はあまり樹種を問わないため、各地域の特色を活かした木材を用いて「その地域特有のカホン」を製作できます。地域の強みを活かしたカホンをを用いることで、様々な地域において地域と森林・林業が密着した木育活動の輪を広げていきたいです。

6. 謝辞

今回の取り組みを進めるにあたって、ササキ研究所様およびホクヨープライウッド宮古工場様に多大なご協力をいただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

7. 参考文献

- ・久慈・閉伊川国有林の地域別の森林計画書：林野庁東北森林管理局
- ・宮古市の統計 平成30年版：宮古市
- ・木育.jp 「1. 「木育」とは何か」 〈<http://www.mokuiku.jp/>〉